

事業実施結果報告書

障害者芸術文化活動普及支援事業

団体名称	社会福祉法人ゆうゆう	代表者	大原裕介
所在地	北海道石狩郡当別町六軒町70-18		
事業担当者	小田晃孝		
連絡先	0133-22-2896(代表)	メールアドレス	yuyu.artbrut@gmail.com(代表)

1 事業概要・成果報告

<p>取り組んだ事業の概要、事業実施により得られた成果</p> <p>※できる限り具体的に記入すること</p>	<p>【取り組んだ事業の概要】</p> <p>社会福祉法人ゆうゆうは、全道の障がい福祉団体と北海道アールブリュットネットワーク協議会を設立し平成27年度モデル事業実施から、広域である北海道全体の連携を進め積極的に行政、大学の芸術学部、美術館を巻き込みながら、障害者芸術活動の相談支援、情報収集発信などに点から面へと地域も分野もつなげる活動を推進してきた。今年度の事業実施にあたりこの広域連携実績を活用・展開する形で、北海道・北東北ブロックエリアの障害者芸術文化活動の推進支援という目標に向け「求められる」広域連携目指して活動を始めた。実施団体支援の立場から北海道でも4圏域で主体的に各圏域の核団体を定め間接的に支援する方法を取った。青森、秋田の2県は事業実施団体が存在するため各団体を支援対象とした。採択団体の無い岩手県は協議会人脈を活かし既に県内で核となっている事業所の協力を得た。このように事業実施をする上で、ブロック全県でパートナー団体を設置し、全域で活動を可能にする体制・土台作りをまず行なった。</p> <p>その後、顔の見えるブロック間の関係構築目指し一方的な調査だけでなく事業開始後速やかに宿泊してのブロック会議と目標策定ワークショップを開催した。後日、宮城県が加わり全5県となったが、同じ方針で開催県を移してのブロック会議を全3回開催。内2回(最初と最後)は宿泊を伴う会議とし、情報交換と連携を深めた。また最初の目標策定ワークショップで開催決定したブロック合同展示会を全3回開催県を替えて実施し約2,000名の来客を得た。締め括りとした北海道札幌での展示会ではギャラリートーク、ワークショップも開催。北海道を含む域内各県からの事例発表を行っていただき具体的な情報と強みの共有を計った。</p> <p>舞台芸術については情報収集を行ったものの、今年度ブロックとしては公演していないが、事業で取組みのある宮城・秋田両県の発表に組み入れ報告していただいた。また舞台芸術の全国報告会では、北海道の特別支援学校演劇部が実演した。また協議会主催の北海道フォーラムの場で、障害者ダンスや音楽パフォーマンスを紹介した。</p> <p>【事業実施により得られた成果】</p> <p>◎未実施県に捉われないブロック・ネットワーク構築/全体的な取組み目指して、未実施県に県全体を把握し本事業の受皿となれる団体を、モデル事業で構築したネットワークを活かし事業開始時に設置。ブロック内に抜けのない実施体制を早く構築したことにより未実施県も含めた実質的なネットワークができた。</p> <p>◎ブロッケー体感醸成/ブロック事業開始にあたり現状把握と行動計画策定のための宿泊研修を、未実施県・岩手で開催。未実施県への働きかけとすると同時に現状に則した柔軟で民主的な方針決定の場としてブロック会議を位置付けることができたことで、闊達な意見交換ができ、ブロックの一体感が生まれた。</p> <p>◎各県の強みのブロック内共有/宿泊研修で関係性を作り概略を把握した上での現地調査を通して、各団体の活動の現状や特長の把握を事務局として努めると共に3回の全体会議と3回の合同展を通じて全体共有を行った。</p> <p>◎宮城県の参画/8月中旬、南東北ブロックの既にモデル事業の取り組みなどで豊富な実績を持つ宮城県のエイブル・アート・ジャパン東北事務局が加わったことで、より多様な交流連携を行うことができ、共有情報の質が向上した。</p> <p>◎巡回合同展示会の開催/一般から見える形としては県を変えブロック展示会を3回開催できた。同時にギャラリートークを通して本事業の概要や具体的な事例の発表を行ない、ワークショップを透して支援ノウハウを伝えることもできた。</p>
--	--

※下記(2)については、広域センターを実施した団体のみ記入すること

(2) 広域センター(ブロックレベル)	
<p>①相談窓口の体制(人数や勤務体制等)</p> <p>※支援センターに対する相談体制、未実施都道府県に対する支援体制を記入すること。</p> <p>※窓口担当が不在時の対応等についても記入すること。</p> <p>※専門家アドバイザーも含め、どのような相談体制で事業を実施したのか、できるだけ具体的に記入すること。</p>	<p>〔担当者〕 常勤1名、兼任4名 〔外部専門家アドバイザー〕 10名 (専門分野：芸術学部大学教授2、特殊支援学校教諭2、学芸員1、弁護士1、施設職員4) 〔対応時間〕 平日9:00～18:00 (メールに関しては24時間受付) 〔設置場所〕 社会福祉法人ゆうゆう本部 (主)、かたるべの森美術館 (副) 〔対応方法〕 電話、メール、ホームページ、SNS 〔相談件数〕 ブロックとしての相談はカウントしていません。 ※北海道としては今年の傾向として認知度が向上に伴い当事者と施設職員からの相談が多く寄せられた。特に丁寧な対応が求められる精神障害当事者の対応では、南関東・甲信ブロック連携事務局の愛成会様と協議会道北事務局であるかたるべの森美術館及び該当地域の協議会参加事業所等と連携して対応した。 〔主な相談内容〕 支援センター運営について。特に青森は初事業実施団体であり、昨年度までの北海道でのモデル事業運営や展示会開催の留意点などをアドバイスした。他団体については未実施県も含めて経験ある団体のため初実施となるブロックに関わる事務的な相談のみ。 〔担当者不在時の対応〕 代表相談窓口をゆうゆう法人本部に置いているため、ゆうゆう本部職員が一時的に対応し担当者に引き継ぎを行う。</p>
<p>②人材育成のための研修計画</p>	
<p>(ア)支援センターに対する研修</p> <p>※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。</p>	<p>〔行動計画策定ワークショップ〕 ◎日時：2017年7月31日(月)～8月1日(火) ◎場所：社会福祉法人光林会会議室 (岩手県花巻市) ◎参加者：青森・秋田・岩手の3県6名と主催側4名 (内1名講師) の計10名 ◎内容： ・事務局報告：ブロック事務局より北海道のこれまでのネットワークの取組実践を紹介し、今年度のブロックの取組計画を説明。 ・現状共有：各県から県内の状況説明と今年度の計画と現状の説明と質疑応答による確認を行ったが、様々な意見交換や議論が行われた。 ・目標策定：事業構想シートを元に現状を目に見える形に整理。各県の目標と実情に沿ったブロックとしての目標策定を目指した。主に初の取り組みとなる青森の合同展を開催しての支援に意見が集約された。 ・連携事業確認：各県のスケジュール確認をしながら連携してできる事業としてブロック展示会開催を決定し、日程や展示作品などを調整確認。</p>
<p>(イ)未実施都道府県に対する研修</p> <p>※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。</p> <p>※(ア)と(イ)を同時に行った場合などは、それぞれの欄に標記し、注をつけるなど、明確に記入すること。</p>	<p>北海道・北東北ブロックでの未実施県は岩手県1県のみであった。そのため事業実施にあたって受皿団体を選定し、全県に対して実施県・未実施県関わらず同じ方針で望んだ。 この未実施県で協力団体に選定した社会福祉法人光林会は、岩手県のみならず東北6県の団体で作る「きららアート協会」の立ち上げに主体として関わり、また障害者芸術活動支援に20年以上もの多大な実績を有する団体であるため、未実施県だけに対する研修は殊更に行わず、実施団体同様1構成者として(ア)の研修に参加いただけた。さらに同研修の場所提供をいただくと共に、併設の「るんびにい美術館」の展示室および作品制作アトリエの参加者全員への見学説明を提案下さるなど、主体的に関わっていただくことができ、充実した研修会とすることが可能となった。</p>

<p>③関係者のネットワークづくり</p> <p>※ネットワーク構築方法、ネットワークを活用した具体的な取組実績について、できる限り具体的に記入すること。</p>	<p>対象地域は北海道、青森、秋田、岩手、そして後に加わった宮城の5道県。</p> <p>このうち北海道、秋田、宮城はすでに「障害者の芸術活動支援モデル事業」に取り組んで来た実績のある団体。青森は今年度事業初実施団体。そして岩手は実施団体の無い。と3層に分かれた構造となっていた。</p> <p>そこでブロック全体で事業実施できる体制を取るため、まず実施団体の無い岩手の情報を収集。最も実績あると思われた社会福祉法人光林会に協議会のネットワークを活かし接触。受け皿団体を快諾していただき、事業始動にあたり全県体制とすることができた。</p> <p>その後各県の現状把握を行い、これまでの北海道での経験を活かした域内連携を模索する中で、目標策定ワークショップなどを通じて受益者ニーズを探りながら、計画に捉われない柔軟な求められる支援を進める方針を決定した。</p> <p>目標策定ワークショップでは各県の状況を情報共有でき、合意事項としてのブロック合同展示会の開催を決定した。</p> <p>またブロック会議を計3回開催したが、内2回を宿泊を伴うものとし参加者以外の各県の関係者との連携や懇親を深める工夫をすると共に、会議の場でも現状確認だけでなく意見交換の比重を大きく設定することで、より密接なネットワーク構築を目指した。</p>
<p>④ブロック連絡会議の開催</p> <p>※実施団体向けの勉強会や外部への報告会の内容、開催時期等について、実施した内容を具体的に記入すること。</p>	<p>◎第1回〈岩手県〉参加者10名 日時：平成29年7月31日/社会福祉法人光林会（岩手県花巻市） 内容：未実施県の岩手で20年以上障害者の芸術活動に取り組む光林会本部で開催。開催自体を岩手県に対するアプローチの1つとすると共に、顔の見える関係作りの場とした。各団体紹介と事業への取組概要などを紹介していただき、闊達な質疑応答、意見交換が行われた。未実施の岩手からも「文化人類学の観点から障害者芸術を捉えたい」など独自の視点からの積極的な意見が出された。</p> <p>◎第2回〈青森県〉参加者12名 日時：平成29年11月28日/青森県立美術館（北海道青森県青森市） 内容：初実施で展示会初開催の青森で展示会の準備を兼ねて開催したことで、大学教授や専門家、学生の参加も得られた。各団体の事業実施状況の報告と意見交換を行い、初実施の青森の参考にもしていただいた。</p> <p>◎第3回〈北海道〉参加者7名 日時：平成30年1月21日/札幌市生涯学習センター（北海道札幌市） 内容：ブロック合同展の締め括りとなる札幌展に合わせ、宿泊を挟んで行なわれた。前日1月20日には札幌展会場の大通美術館で、アンケート回収ベースで52名の観客を集めたギャラリートークの形で、具体的な事例を交えた一般向けの各県からの報告会を開催した。会議では今年度実施したブロック合同展示会を中心とする今年度のブロック連携の取組の評価と反省や今後に向けての意見交換を行い、各県の強みや特徴を改めて情報共有し、今後の情報活用に道を付けた。</p>
<p>⑤障害者芸術・文化祭との連携</p> <p>※全国障害者芸術・文化祭やサテライト開催と連携した実績について、具体的に記入すること。</p>	<p>全国障害者芸術・文化祭奈良大会については、各県で個々に出展、出展協力などが行われたが、ブロック事務局としては連携した取り組みを今年度は実施していない。北海道では北海道アールブリュットネットワーク協議会を通じ、また様々な機会をとらえた道内への広報協力を行なった。</p>

<p>⑥文化プログラム等について</p> <p>※東京2020参画プログラム、beyond2020への申請内容、取組実績などについて記入すること。</p>	<p>東京2020参画プログラム、beyond2020の認証を受けた事業は、ブロックとしては今年度実施していない。</p>
<p>⑦その他</p>	<p>第3回北海道・北東北ブロック展「札幌展」の付随事業として、ブロック事務局主催でギャラリートークとワークショップを開催した。</p> <p>◎ギャラリートーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者：青森、秋田、岩手、宮城の事業担当者と北海道の支援者計5名 ・コーディネーター：北海道教育大学芸術学部教授・北海道アールブリュットネットワーク評価委員 三橋純予氏（北海道） ・内容：北海道、青森、秋田、岩手、そして宮城を加えた各県から一般向けに具体的な1事例を掘り下げた発表をしていただいた。その際にあらかじめ先進の取組が見られた県に、ネットワーク作り、町おこし、支援、商品化、権利擁護の各テーマを振り分けたため、各分野の研修も兼ねることができた。アンケートで把握できた観客数は支援者と一般の入場者含め52名。 <p>◎ワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：社会福祉法人光林会るんびにい美術館 板垣崇志氏（岩手） ・参加者：北海道内各所の支援者17名 ・内容：指導する技法を学ぶのではなく芸術活動支援者としての意識改革を目指すワークショップ。意識の転換を促す様々な異質の体験と具体的な事例紹介で、特別な芸術知識が必要無いことと、指導の無い寄り添う支援のノウハウを実践的に伝えるワークショップとなった。

※下記については、全実施団体が記入すること。

事業の実施により得られた成果の今後の活用について

※事業の実施により得られた成果の今後の活用方法について具体的に記入すること。

1. ブロック全体の自律的な連携活動

北海道ではネットワーク協議会として全道の調査、参加型展示会での発信などの活動を行なったことにより、北海道全体の障害者芸術が分野を越えて一般にも認知され始め、新聞への連載、アート専門ギャラリーやホテルなどでの展示や販売、事業所での取組みの拡大など数多くの波及効果が生まれた。また点在していた活動が一つひとつ拡充すると同時に面となり、離れた事業所同士の連携活動が生まれるまでに至っている。こうした経験から今年度ブロックレベルでの調査や合同展示会を複数回行えたことで、成果として既に県を越えた人的交流も見られたので、まだ不十分ながら今年度の連携事務局としての活動が触媒の役割を果たし、今後北海道・北東北ブロック間で、北海道で見られたような自律的な連携による派生的な活動につながると推測する。

2. 強み共有による活動拡充

今年度は3回のブロック会議と合同展示会で各県の取組を発表いただき、熱心な意見交換があった。これにより各県の特徴ある取組をブロック内である程度情報共有できた。岩手の豊富な経験とプログラムとして体系化目指した意識的なノウハウ構築、秋田の商工会などと協働した積極的な廃墟利用などを始めとする芸術による町おこしの方法、青森の豊富な地域資源としての施設や人材を適材適所に活かした丁寧な取組み、宮城の他団体との幅広い連携や工夫された作家作品アーカイブなどが、実施する上での課題なども含めた実践的な生きた情報として共有され、今回構築した顔の見える関係性により、少なからず各県の今後の活動に反映実施されることが期待される。特に初実施となった青森県では立ち上がりの充実に受益があっただけでなく、今後の活動において近隣県との連携が容易になったことで個別の情報交換ができ、きめ細かい活動拡充につながる。

3 支援者への波及

豊富な実績と独自性を持つ団体が参加してのブロック合同展示会を開催できたことで、県毎の活動や評価の特徴が垣間見られた。このことは支援活動を行なっている担当者には障害者芸術の多様性や作品の品質を考える良い機会となったと思われる。それは意識変化を促し今後の支援活動、評価活動に影響を与え、独自の観察眼を養い、より多様性ある作品の発掘や発信につながるという好循環の緒端となる。

4. 圏域の啓蒙

合同展はまた初めて触れる来場者には障害者芸術のショーケースとなり理解の一助となった。広報活動を通してテレビや新聞にも取り上げられ、他県の作品も多く展示されたブロックという規模感も相まって従来の障害者芸術展とは異なるより多様性あるダイナミックなイメージを受けていただけたと特に札幌展を通じて聞いている。これは今後の活動にとって有意義な支えとなる。

今年度の取組においてはノウハウ集や作品データベースなどの成果物の作成にまで至らなかったため、具体的に見える活用方法をここに記述できなかったが、ブロック活動により、以上のような成果の活用が期待できる。